『美しい花には棘がある』※本文一部抜粋

「――言いたいことはそれだけですか？」

彼女の口から紡がれた予想外の言葉に、岩瀬の口から「へ？」という情けない声が出る。
「お済になりましたのなら、もう宜しいでしょうか。急いでおりますので」
「え、いや……えぇ……？」
「それと、女性を口説く際は、お話する内容に気を付けた方が良いかと思います。ご自身の評価を上げようと、他の方を悪しざまに言うのは、逆に貴男の評価を下げることになりますから」

――相手の想い人のことなどは、特に。

彼女の瞳が、まるで人を射抜くかのように鋭くなる。
「現に私は、貴男のことが大変気に食いません」
彼女のそんな一言に、岩瀬の表情が引き攣る。
そして彼女は目を細め、にこりと怪しげに微笑んで見せた。
「私を口説きたいのなら、私の夫よりも素敵な男性になって、出直してきて下さいませ」

――最も、貴男には無理だと思いますけれど。

そう言い残すと、奥さんは俺達に背を向けて歩き出した。
すると、岩瀬が大きな舌打ちを１つ鳴らし、彼女を追いかけて足を踏み出す。
「調子に乗りやがってぇ！」
岩瀬が、背を向ける彼女に向かって大きく腕を振り被った。
「岩瀬！　やめろッ！」
俺は岩瀬を止めようと咄嗟に手を伸ばす。
その瞬間、こちらに背を向けていた彼女が素早く振り返り、岩瀬の喉元へ勢いよく手刀を入れた。
衝撃で岩瀬の口から声にならない音が漏れ、彼女はそんな岩瀬に更に追い打ちをかけるように、今度は腹に強い拳を入れる。
首と腹を庇いながら、後ろに体をふら付かせた岩瀬の足を彼女が軽く引っかけると、彼は情けなく地面に倒れ込み、蹲ったまま動かなくなってしまった。
一瞬だった。そんなあまりにも唐突で衝撃的な光景に、俺は呆然としてしまう。
奥さんは髪と着物を軽く整えると、未だ呆然として身動きが取れない俺を見る。
目が合いハッとした俺に、彼女は何も言わず、まるで野花がふわりと咲くように優しく笑いかけた。